福岡城武具櫓跡の調査

ふくおかじょうぶぐやぐらあと

— 官兵衛も見た！？ 福岡城武具櫓跡が100年ぶりに姿を現す！—

平成26年3月15日
現地説明会資料

福岡市経済観光文化局大規模史跡整備推進課
TEL 092-711-4784

【あらまし】

福岡城は、黒田長政や父の如水（孝高（よしたか）：官兵衛）によって1601年から建設が始まり、1607年に竣工しました。福岡城本丸の南端に位置し、城内で最も高い石垣（12.5m）の上に築かれた武具櫓は、城内に設けられた47棟の櫓の中でも最大規模級の建物で、威容を誇っていました。右の写真は武具櫓が城内に建っていた時のものですが、二階建の多聞櫓と両隅に三階建櫓及び出入用の附平櫓から構成されていたことがわかります。

建物内には、「武具櫓」の名が示すとおり、戦に関連した陣鐘（じんがね）、陣貝（法螺貝：ほらがい）、弓矢、槍、旗、馬具などのほか、火縄銃や大砲と共に火薬の原料である硝石や硫黄、火縄などの火縄銃や大砲に関連するものも収蔵されていたことが記録に残っています。

【発掘調査成果】

発掘調査により、武具櫓は長さ63m・幅9mであることが明らかになりました。建物の高さは、推定で二階多聞櫓が9m、三階櫓が12.7m、石垣の下からだと21.5mと25.2mとなります。これは、7階建の長大なビルが長さ63mにわたって建っているのと同じで、城の裏手である搦め手（からめて）から攻撃する敵に対して十分な脅威になっていたことでしょう。官兵衛と長政の親子間でもめるほどにこだわった所と逸話が今に残ることに納得してしまう大きさです。

この巨大な建物を支えているのが、石垣と礎石です。石垣は主に自然石（玄武岩）を積み上げた野面積みで、勾配は60度を測ります。礎石は建物の土台を直接支えるもので、地面に大きな穴を掘り、穴の底に大小の石を敷き並べた上に巨石を据え付けたものを等間隔に配置しています。これは、礎石を安定させるとともに、上からの力を分散させるために考案され、古代から伝承されてき高度な土木技術です。礎石は建物が撤去された際には全て残っていたようですが、残念なことに、その後の公園整備工事で壊されたり、移動したりしている礎石も多々あることが判明しました。

建物の北側では、建物の軒下に沿って溝が作られています。雨落溝（あまおちみぞ）です。屋根から流れ落ちた雨水は、石組みの雨落溝を通って東西の石垣に流れ出るルートと、西附櫓の東側を北進して武具櫓御門へ流れ出るルートがあります。

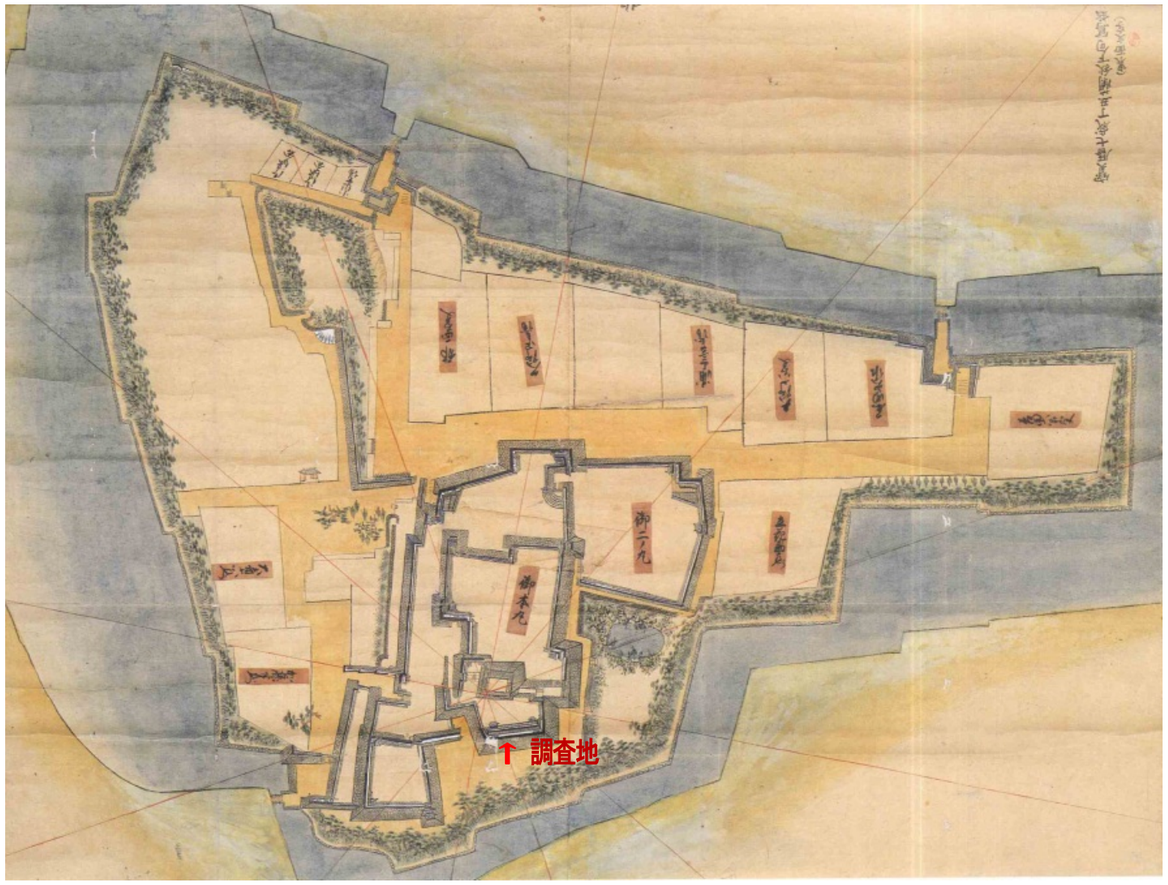
建物の建替えは、東西の三階櫓については記録に残っています。調査では、礎石据え付け穴や溝の裏込め石の間に瓦が挟まっていることや埋められた位置の異なる雨落溝などから、二階多聞櫓でも建替えが行われていたことも判明しました。築城時の櫓規模や、その後の変遷を知るには櫓建物の基礎の下を掘る必要があり、今後の本格的調査で解明したいと考えています。

出土遺物は、屋根を飾った各種の黒色瓦、火縄銃や抱え大筒の弾丸と材料である鉛塊などがあり、古文書記録と合致しています。特に、瓦類は、名島城で使用されていた鬼瓦や朝鮮系の瓦が出土して福岡城の歴史を物語るとともに、屋根の黒色瓦が壁と同じ白漆喰で固められていました。

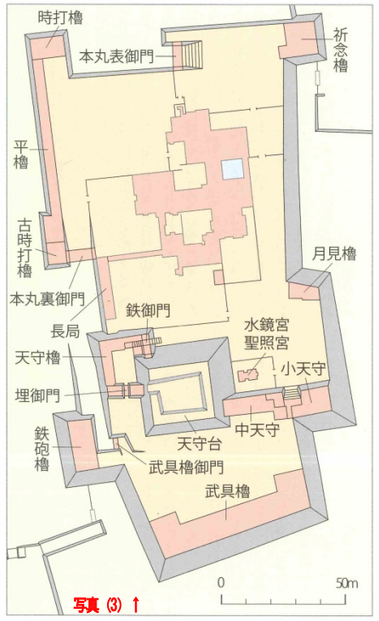
白と黒の2色で構成される福岡城のカラーデザイン（意匠）はシンプルで力強く、どっしりとした自然石を多用した野面積みの石垣と合間って、福岡城はどことなく黒田官兵衛そのものであると感じるのは調査を担当した私だけでしょうか？

【櫓のその後】

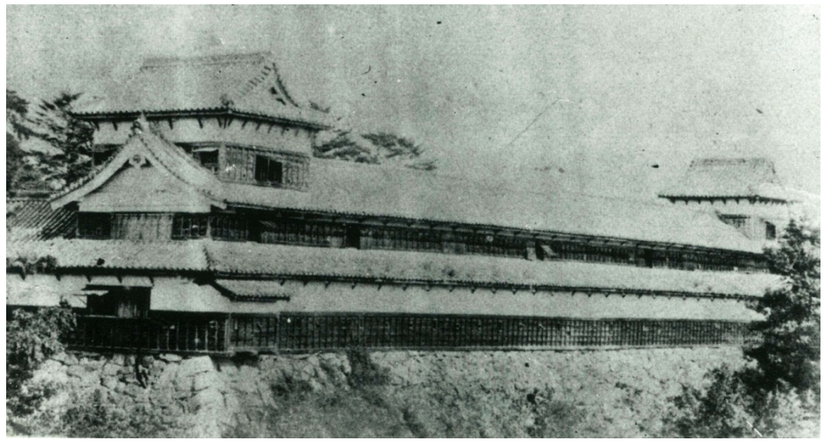
建物は明治時代以降も城内にそのまま残っており、駐屯していた帝国陸軍の施設として使われていたようです。大正5年に先の殿様である黒田家に払い下げられ、浜ノ町の別邸に建物規模を変えて移築されましたが、昭和20年の空襲で焼失しました。



(1) 福岡城絵図（1757年複写）　【福岡県立図書館蔵】



(2) 本丸内の櫓と門

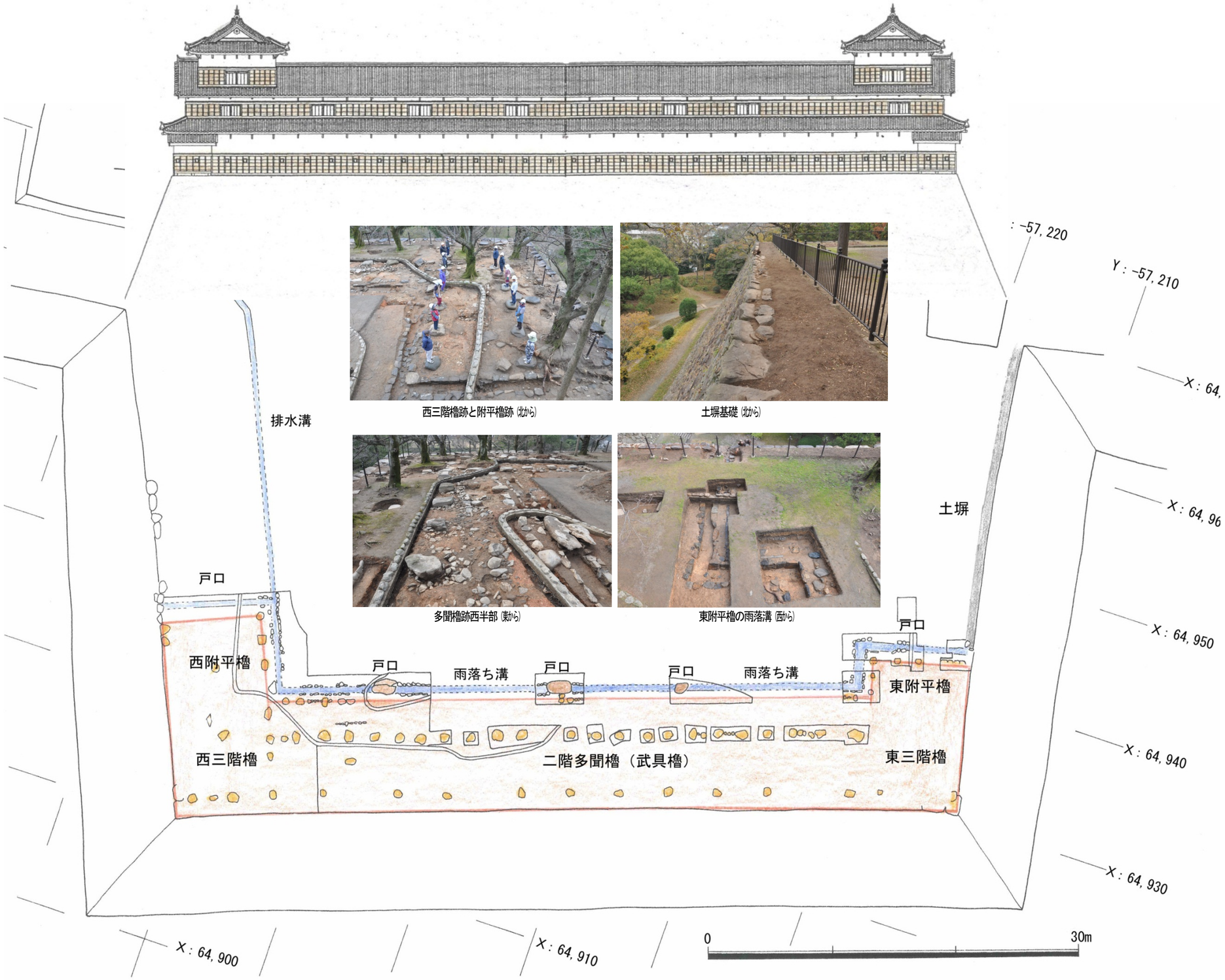


(3) 福岡城に在りし日の武具櫓（南西から）　※大正5年（1916年）以前に撮影

出典：(1)「福岡城の櫓」福岡市教育委員会 1994年

出典：(2)「福岡城　新修福岡市史特別編」福岡市 2013年

※註【櫓推定復元図は九州産業大学名誉教授 佐藤正彦先生作成】



福岡城武具櫓跡遺構図